

豊かな水をもたらした 地形の成り立ちと先史時代

松江市が島根県を中心として、また歴史的に環日本海地域で重要な役割を果たしてきたことは、その地理的・地質的な特質が大きな要因となっています。豊かな水も、大きな観点で見ると自然が形成してきた地形と大きなかかわりがあります。最初のストーリーは、豊かな水をもたらす現在の地形が、どのように形成されていったかを探っていきます。それは日本列島が大陸の一部だった時から始まります。一見何の関係もなさそうなどとも古い時代のことですが、その時代に形成された地質が、人間が生活を始めてからのこの地域の特質の基盤となっているのです。その先、ストーリーⅠは人間が住み始めた旧石器時代から縄文時代まで続きます。まだ中海・宍道湖が湖（内海）になっていない時代で、人間の歴史のなかでは大まかに先史時代にあたります。

1. 大陸からの分離と海の形成

陸地は動いている 地球の表面はプレートと呼ばれる固い殻に覆われています。プレートはいくつかの塊に分かれていて、流動性があるため、プレート下のマンツルの活動により移動をしています。

約2億5千万年前には大陸は一つにまとまっていたと考えられています。大陸を構成するいくつかのプレートが異なる動きをし、その境界で分離をしていきます。大陸の間には海が侵入し、やがて現在のような「七つの海と七つの大陸」で地球上は構成されるようになりました。

(1)ユーラシア大陸の時代

約8,500～5,000万年前、日本列島のかなりの部分はユーラシア大陸の東端にありました。この一帯では激しいマグマ活動が起こり、地球内部から上がってきたマグマが、深い場所でゆっくりと冷やされて固まった花こう岩類が形成されてきました。この時代の岩石が中国山地の大部分を形作っている花こう岩として残されています。松江市内でも基盤はこの花こう岩類ですが、その後の火山活動による岩石類に覆われているところがほとんどで、地表に見えているところは多くはありません。宍道湖・中海南部の山間部の一部に、そのころの花こう岩が露出しているところがある程度です。その代表が忌部町の一部で認められる、「忌部

御影」と呼ばれた花コウ岩です。この花コウ岩が風化し、土砂化してできたマサが河川によって運搬されて、その後の宍道湖や中海周辺の地形形成にも大きな影響を与えました。

およそ65万年前以降の氷期に、忌部川によって削られて下流に流されたマサは、乃木地区の平野を形作るとともに、強い西風や宍道湖の流れによって東に流され、中世に湊町となる基盤となった白潟砂州を形作ったと考えられます。また八雲町あたりに分布する花コウ岩とマサは、意宇川で削られて下流に流出し、竹矢町あたりの砂州堆積とその背後の意宇平野を形成しました。古代出雲の中心地です。

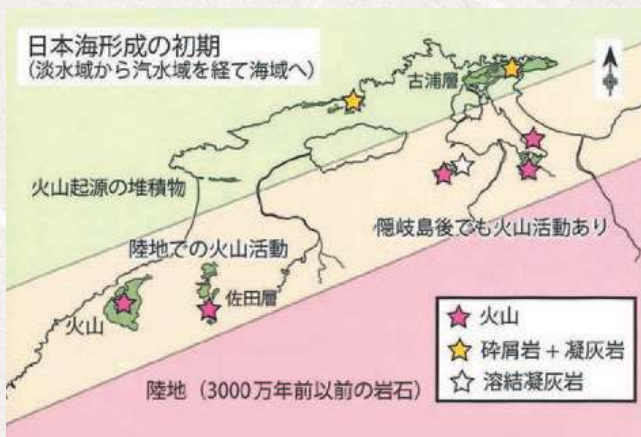


松江市東忌部町の花コウ岩

(2)大陸が裂け始める時代

大陸の東縁で起こったマグマ活動は、その後2,500万年前ころに活発化します。この火山活動を伴いながら、大陸が裂け始めました。この裂け目は、やがて長大な湖に成長し、のちの日本海の原地形となります。

このころの火山活動で噴出した火砕岩や火山灰が、湖に堆積して凝灰岩や砂岩を形作りました。島根半島部では鹿島町の海岸付近や美保関町周辺で見られ、「古浦層」と呼ばれています。国指定名勝の美保の北浦は、この層と次の(3)の時代の地層を現在の日本海が浸食してできた地質記念物です。



2000万～1700万年前の模式図
(『松江市史 史料編1』より引用)



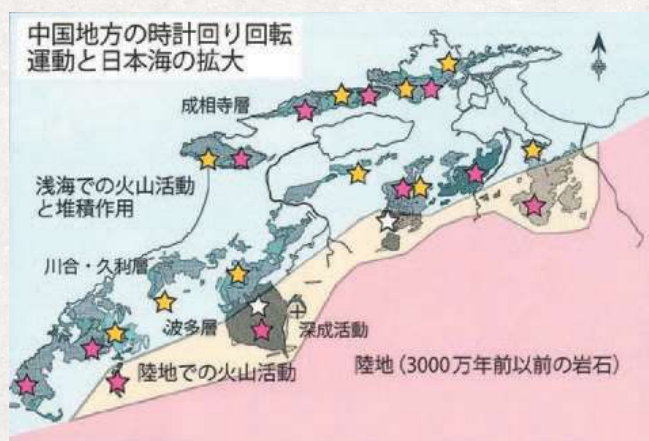
美保の北浦

(3)拡大する日本海の時代

ユーラシアプレートの東に広がる海洋プレートが、大陸の下に潜り込んでいくことで、日本列島部分はさらに大陸から引き離されます。日本列島の西南側は、南からフィリピン海洋プレートが北の太平洋プレート側に拡大することで、時計回りに大陸から引き離されて南下し、急激に海水が浸入して日本海が誕生しました。このような地殻変動に伴いマグマの活動はさらに活発化して、1,600万年前ごろにピークを迎えました。この時の火山活動でできた火山岩（流紋岩）が飛び出しているのが、美保関町地蔵崎沖の「沖の御前」島です。北山山地の主要な山々も、このころの火山活動で



日本海の急速な拡大模式図
(『松江市史 通史編1』より引用)



1700万～1500万年前の模式図
(『松江市史 史料編1』より引用)

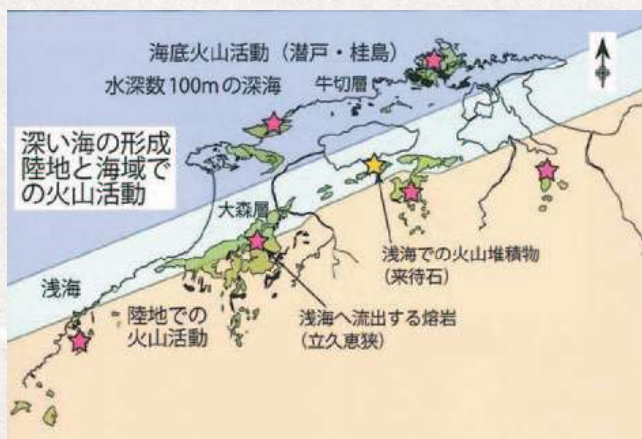


白来待石製石棺（徳連場古墳）

きたものです。また宍道湖南岸にも、この時の火山活動による噴出物が堆積した泥岩があり、その中に含まれた細粒凝灰岩が変質してゼオライト化したのが「白来待石」で、古墳の石棺や中世の石造物に使われています。

(4)日本列島が今の位置に固定された時代

1,500万年前ごろ、日本列島部分が大陸から離れていく地殻運動が終わり、現在の日本列島の基礎的な形が形成されました。島根半島付近の海底は、引き続き激しい地殻変動や火山活動の場となりました。この時の溶岩でできた火山岩を、島根町加賀の桂島で見ることができます。また火山から流れ出て、深い海で堆積した岩石が後に海上に現れ、柔らかい泥岩部分とやや硬い砂岩が浸食され洗



1500万～1400万年前の模式図
(『松江市史 史料編1』より引用)



島根町須々海海岸洗濯岩

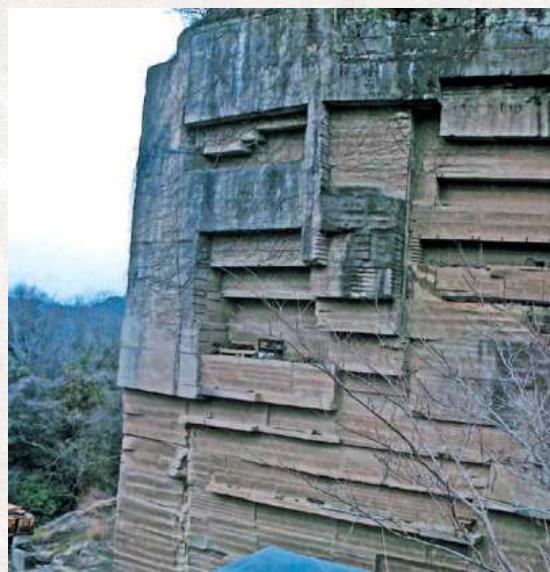
濯板状になったのが、島根町須々海の海岸です。国指定名勝及び天然記念物「瀬戸（くけど）」や天然記念物「多古の七ツ穴」を構成している岩石もこのころにできたもので、のちに島根半島が出来上がったのち、海の波によって浸食された崖や洞穴です。

宍道湖南岸は陸化していましたが火山活動は活発で、その時の溶岩が固まった岩石層を大森層と呼びます。玉湯町南部の山や忌部地域の広い範囲にこの火山岩が分布しており、メノウを産出する花仙山はその代表です。また松江城の石垣などに使われている忌部安山岩も、このころのものです。

大森層の火山活動が続いているときに噴出した、火山灰や火山礫などが、眼前の浅い海に流れ出て堆積してできたのが来待石です。古墳時代の石棺や石室、中世・近世の石塔、松江城下町の建築材や石臼などの生活用品、近世以降の灯籠や狛犬など、多様な石造物の原材料となりました。



花仙山産青メノウ（碧玉）



来待石の石切り場

現在の中海や宍道湖の低地形を作る南北の高まりが、この時期におおむね形成されましたが、島根半島部はまだ海中にありました。

13,000万年前ころになると、激しい地殻変動や火山活動が一段落し、しばらくの間静かな海が広がるようになります。この時代に、海の中に細かい泥が堆積しました。これが玉湯町から乃木地区の低い山を作っている布志名層で、暗灰色の細かな土です。宍道湖の北岸地域に広く分布する低い丘陵地も、これと同様の泥岩で古江層と呼ばれます。布志名層と同様の土が、より沖合で堆積し、1,000万年前以降に隆起して陸地になったとみられています。

宍道湖北岸の北山山地の南側が、山の高さが広い範囲で低く平らで、細長い谷が連なっているのは、この古江層が広がっていて、比較的軟らかい泥岩でできているためです。

(5)島根半島が陸になった時代

1,200万年前ころ、現在の松江北部の土地が盛り上がっていき、今の島根半島が海上に突き出して、中江・宍道湖付近が内湾化していききました。一度沈静化した火山活動が再び活発化し、茶臼山をはじめとする大橋川南岸の山や丘陵を形作ります。矢田町の大橋川に浮かぶ塩楯島はその時に溶

岩が噴出した噴火口です。また宍道湖に浮かぶ嫁が島も、この時代の溶岩が固まった玄武岩でできています。茶臼山は松江市の南のモニュメント的な独立峰で、『出雲国風土記』には神名備野（かんなびぬ、神がこもる山の意味）と記されています。



来待石で作られた狛犬（生馬神社）



1400万～1100万年前の模式図
（『松江市史 史料編1』より引用）

東津田町、現在の東光台団地あたりでは、安山岩の溶岩が基盤を作っています。この石は「矢田石」と呼ばれ、松江城の石垣に多く利用されました（松江の石をめぐるヒストリー参照）。特に天守の石垣は、多くが矢田石なので、築造の早い時期に多く利用されたと考えられます。



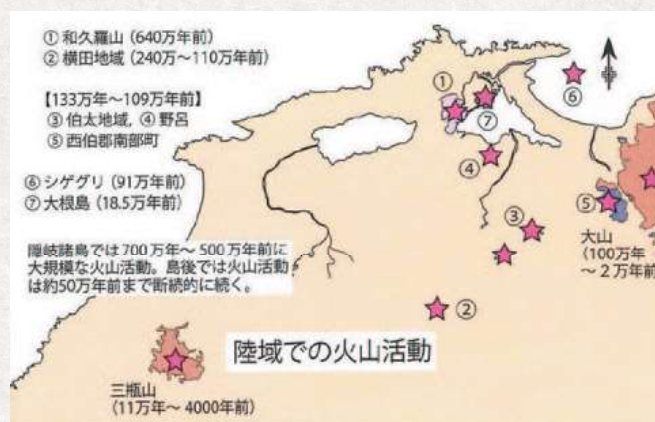
塩楯島（ほぼ円形の火口跡）
（『松江市史 史料編1』より）



● 松江の石をめぐるヒストリー

<https://sitereports.nabunken.go.jp/131528>

600万年前ごろには、デイサイトという岩石をつくる火山噴火が起きました。松江市街の東側に並んでそびえている嵩山（だけさん）と和久羅山（わくらさん）です。この二つの山は、北山山地の南に独立してそびえているので、出雲地方の平野部からはとてもよく見える山で、『出雲国風土記』



640万～18万年前の模式図
（『松江市史 史料編1』より引用）



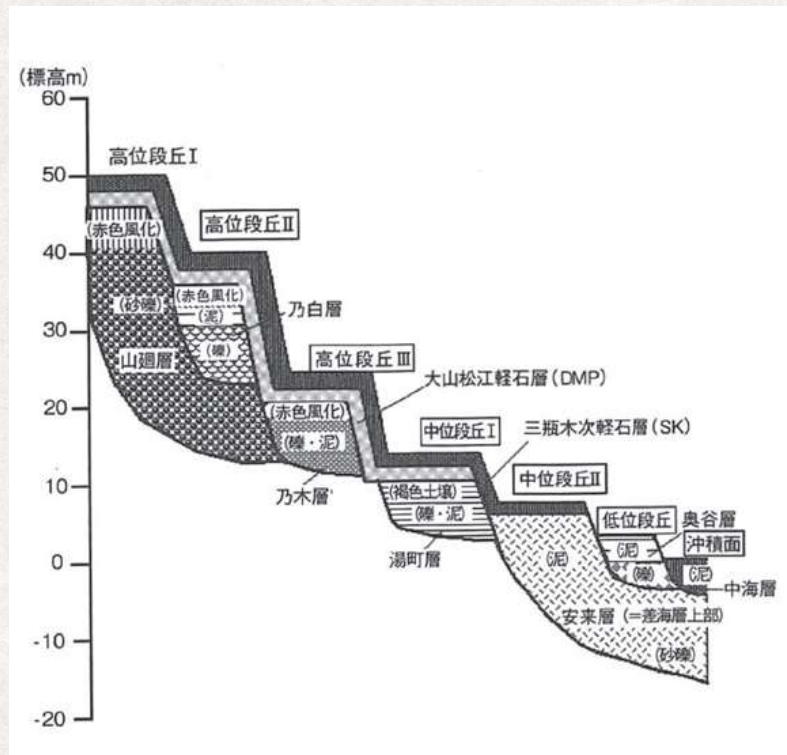
嵩山（左）と和久羅山（宍道湖大橋より）

には嵩山には烽（とぶひ、狼煙台のこと）が設置されたことが記されますし、和久羅山は戦国時代にとっても重要な山城となりました。和久羅山から採れるデイサイトは、「大海崎石」と呼ばれ、松江城の石垣ではたくさん用いられています。やや赤っぽいものが多く、見分けやすい岩石です。

茶臼山をはじめとする松江市街南郊の丘陵と、北側の嵩山・和久羅山が火山活動で形作られることにより、中海から穴道湖に至る低地帯は南北双方から挟まれる格好になりました。この火山活動がのちに中海と穴道湖を結ぶ、大橋川と矢田町付近の水道が現れる基盤となりました。中海と穴道湖を分けたこの地形が、松江の歴史的特質を形作る大きな要因となるのです。

(6) 平地周りの低丘陵（段丘）ができた時代

今から259万年前から、地質時代の区分でいう「第四紀」が始まります。激しい地殻変動がおさまりますが、地球の気候変動に呼応して、周期的に温度が高い時期と低い時期が交互に訪れます。地球規模で温度が高くなると、極地の氷が溶け出して海面は上昇し、海が陸地の深くまで浸入します。一方、温度が低くなると、反対に海面が下降して陸域が広がります。



松江周辺の段丘模式図
（『松江市史 通史編1』より引用）

暖かい時期は海や陸の水域に土砂が流入して堆積し、平坦な土地が広がる場所ができます。寒い時期は海面が下がるため、平らになったところが陸上に顔をだし、そこに川が流れて平坦面を侵食します。これを繰り返してできたのが段丘です。全体として寒冷化していくので、古い時期ほど標高が高いところに段丘平坦面が残り、次第に段丘面は下がっていきます。33万年～12万年前ごろのことと考えられています。

松江の周辺では、宍道湖の南岸と中海西側の嵩山裾野付近に、段丘の痕跡である低丘陵や台地が広がっています。特に松江市街の南から玉湯町の宍道湖岸付近に台地が広がっていて、人間が松江に住み着いて以来、格好の活動の場となりました。

(7)大根島の形成

段丘が形成されているさなかの18万年前ごろ、松江周辺で最後の火山の噴火がありました。中海に浮かぶ、玄武岩でできた大根島の形成です。寒冷な時期に爆発したと考えられ、のちに海水が浸入して島となったものです。大根島では、粘り気の小さな溶岩が川のように流れる間に、その表面が固まったものの、中心部が固まる前に溶岩が抜け出してしまっただけでできた溶岩隧道（トンネル）が2か所みられ、国の特別天然記念物・天然記念物に指定されています。

江島と大根島の玄武岩は、黒くて硬い岩石ですが、石に気泡が入って小さな穴があるのが特徴です。少なくとも江戸時代以降、「島石」として切り出され、建物の基礎や建設資材として利用されました。



空から見た大根島と江島
（『松江市史 史料編1』より）



島石の基礎（興雲閣）

(8)氷期から後氷期（完新世）へ — 現生人類の時代に —

地質年代でいう第四紀の後半（およそ65万年前以降）になると、地球全体が寒冷化していき、氷期を迎えます（氷河時代ともいう）。全体的に寒い気候の中で、周期的に暖かめな小期と寒めの小期を繰り返していて、寒冷期には大陸と地続きになったり、限りなく近づいたりしています。空を飛ばない動物は、このような寒冷期に日本列島にわたってきたものも多いと考えられます。

日本列島に人間（ホモサピエンス）がやってきたのは、氷期の中でも最後の寒冷期を前後する時期で、約38,000年前のことと考えられています。この時期はやや温暖な気候で、日本列島と大陸は海で隔てられていました。つまり、私たちの祖先は舟で海を渡ってやってきたことになります。人間は早くから、水（海）を障壁としてだけでなく、移動の手段として利用していたのです。

このころの松江周辺は、氷期で海水面が下がっていたため、中海や宍道湖は陸地で、島根半島は隠岐に向かって陸地が広がっていました。地形と人間活動の関係は、のちの項で詳しくお話しします。

2. 松江市の自然文化財（自然名勝と天然記念物）

以上のように、松江市周辺は、長い間の地殻変動や火山活動、水による浸食・堆積などの自然活動が累積して形作られてきました。その結果、複雑な地質環境のうえに松江の現在があります。松江市内にたくさんの自然的文化財があるのはそのためです。

特に島根半島部は、縄文時代に海面下で遺跡が見られることから、大きく見ると沈んでいく傾向にあるようです。山地は雨水や川で削られた谷と、高く残った尾根でできています。その山が沈んでいくと谷に海水が浸入して、複雑な海岸線（リアス式海岸）を形作ります。やがて海の波が水際を削っていき、崖となったり（波食崖）、削り残って島となったりしています。島根半島の地質は複雑で、削られた崖面には様々な岩石のありさまが現れます。また崖に現れた地層には、硬い岩石部分と比較的軟らかくて細かい粒子の岩石部分があり、長い時間の間に軟らかい部分を多く削り、硬い部分が多く残ります。こうした海の浸食活動が、奇岩や洞窟などを作り出し、古来より人々に自然の美しさをめでられた名勝地となりました。また複雑な地形の成り立ちが表面に現れて、全国的にもめったに見ることのできない地質構造として、天然記念物となりました。

以下は、今後も守られ活用されるべき文化財として、指定・登録された名勝や天然記念物を紹介していきます。

「潜戸」（国指定名勝および天然記念物）

島根町加賀にある海蝕洞窟です。前項の(4)の時代（1,450万年前）に起こった火山活動でできた岩石が日本海に突出しており、そこに新潜戸と旧潜戸の二つの



旧潜戸（『松江市史 史料編1』より）



新潜戸（『松江市史 史料編1』より）

洞穴が開いています。新潜戸は岬の先端の潜戸鼻を貫いている長さ200m、高さ40mの大型の洞穴で、東西の貫通する穴を見通すと東側にある的島の洞穴が見えます。溶岩や火山堆積物の岩に断層が生じ、東西に連なった断層部分が削られて穴が開いたものです。『出雲国風土記』島根郡条には、「加賀の神埼」として登場し、佐太大神の母神が弓矢を射とおしたという伝承が記載されています。古代の人たちも、壮大な洞穴を観て神様にまつわる意味づけをしたものと思われます。まさに古代からの名勝です。

旧潜戸は潜戸鼻から300mばかり南にある、行き止まりの洞穴です。いつからか、「賽の河原」伝説が残されており、人形などの亡くなった子どもへの品が置かれています。

大根島の溶岩隧道（ずいどう・国指定特別天然記念物・天然記念物）

二つの溶岩トンネルがあり、第一溶岩隧道（幽鬼洞）は特別天然記念物、第二溶岩隧道（竜溪洞）は天然記念物に指定されています。(7)の時代（18万年前ごろ）に大根島の火山活動とともにできました。大根島を形成した溶岩は、ハワイ島キラウエア火山のように粘り気の少ない溶岩です。その表面が固まった後に、内部のまだ液体状の溶岩が流れ出て空洞になったもので、中に入ることができるとても珍しい例です。内部には、暗い洞窟の環境に適応した、世界的にも珍しい生物が棲みついています。



大根島の溶岩隧道（上が第一、下が第二溶岩隧道）
（『松江市史 史料編1』より）

多古の七ツ穴（国指定天然記念物）

島根半島の最北端に突き出た多古鼻の東にある海食洞穴です。(5)の時代に、熱い溶岩が水中に噴出して急に冷やされ、粉々に砕けたものが堆積した岩石が基盤となっています。長さ400m、高さ30～50mの海食崖に、波によって軟らかい部分が深く浸食されて大小9か所の洞穴があります。海岸から見える洞穴が7か所だったため、「七ツ穴」と呼ばれています。



多古の七ツ穴近景
(『松江市史 史料編1』より)

築島（つきしま）の岩脈（国指定天然記念物）

島根町野波沖に浮かぶ築島に見られる岩脈や岩床です。島の地質は、前の項の(4)の時代（1,400万年前）に噴出した玄武岩質安山岩溶岩や、その時に流れた火砕流を中心としています。白っぽい火砕岩層の中に、地層面に対して高角度で貫入したマグマが固結した岩脈や、地層面に沿って平行に貫入した岩床が見られます。『出雲国風土記』島根郡条には「附嶋」（つきしま）との記載があります。



築島の岩脈近景
(『松江市史 史料編1』より)

美保の北浦（国指定名勝）

島根半島東の先端、美保関町地蔵崎から七類湾にかけての約8 kmにおよぶ、日本海に面した海岸が美保の北浦です。前項の(2)と(3)の時代（1,900～1,600万年前）にできた様々な地層が波に洗われて露出し、絶壁や洞穴、奇岩などの絶景を作り出し



美保の北浦
(『松江市史 史料編1』より)

ています。景勝の中心は、半島東端の馬見ヶ鼻近くにある「出雲赤壁（せきへき）」です。高さ130m、幅70mほどの規模で、流紋岩の岩脈が絶壁となっています。赤壁と呼ばれるのは、岩石の成分から染み出た鉄分が赤褐色に発色しているためで、海の紺碧と調和して雄大な景色となっています。奈良時代編纂の『出雲国風土記』にも、「美保埼」の項に「周りの岸壁は切りたって、けわしい海際の山である。」と説明がしてあります。

枕木山（市指定名勝）

松江市街の北側に連なる山地の東端にそびえる標高456mの山が枕木山です。このあたりの山々は(3)の時代（1,600～1,450万年前ごろ）の火山岩類や堆積岩類などからなり、南の中海側からと北の日本海からせりあがった山地となっています。頂上からは、東側に中海、大根島、江島、弓ヶ浜から大山まで見渡せる景勝地です。枕木山はじめ、このあたりに連なる山々は、峻厳な地形が多いことから、古代より山岳信仰と修験の場でした。枕木山頂上には、平安時代初期の開基と伝わり、多くの文化財を所蔵する華蔵寺（けぞうじ）がいまでもあり、稜線がつながる澄水（しんじ）山にも古代には寺院があったことが知られています。また奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に「大倉山」と記された山と考えられます。

嫁ヶ島（国登録名勝）

宍道湖に浮かぶ唯一の島で、松江市街に近い南岸からの眺めは、市民や観光客に愛される名勝になっています。全長約110m、幅約30mと小さな島に、松の木と小祠があり、景色のアクセントとなっています。島は玄武岩でできていて、前項の(5)の時代（1,200万年前ごろ）に形成された岩石です。対岸には円城寺の山が宍道湖にせり出し、江戸時代以降「袖志ヶ



松江城天守から望む嫁ヶ島

浦」と呼ばれる景勝地でした（現在は埋め立てられて陸地部分が多くなっています）。『出雲国風土記』には「蚊島（かしま）」とされ、野代（のしろ）の海の中にある、と記されています。あえて場所が特定されていることから、現在と同様に景勝の地だった可能性もあります。

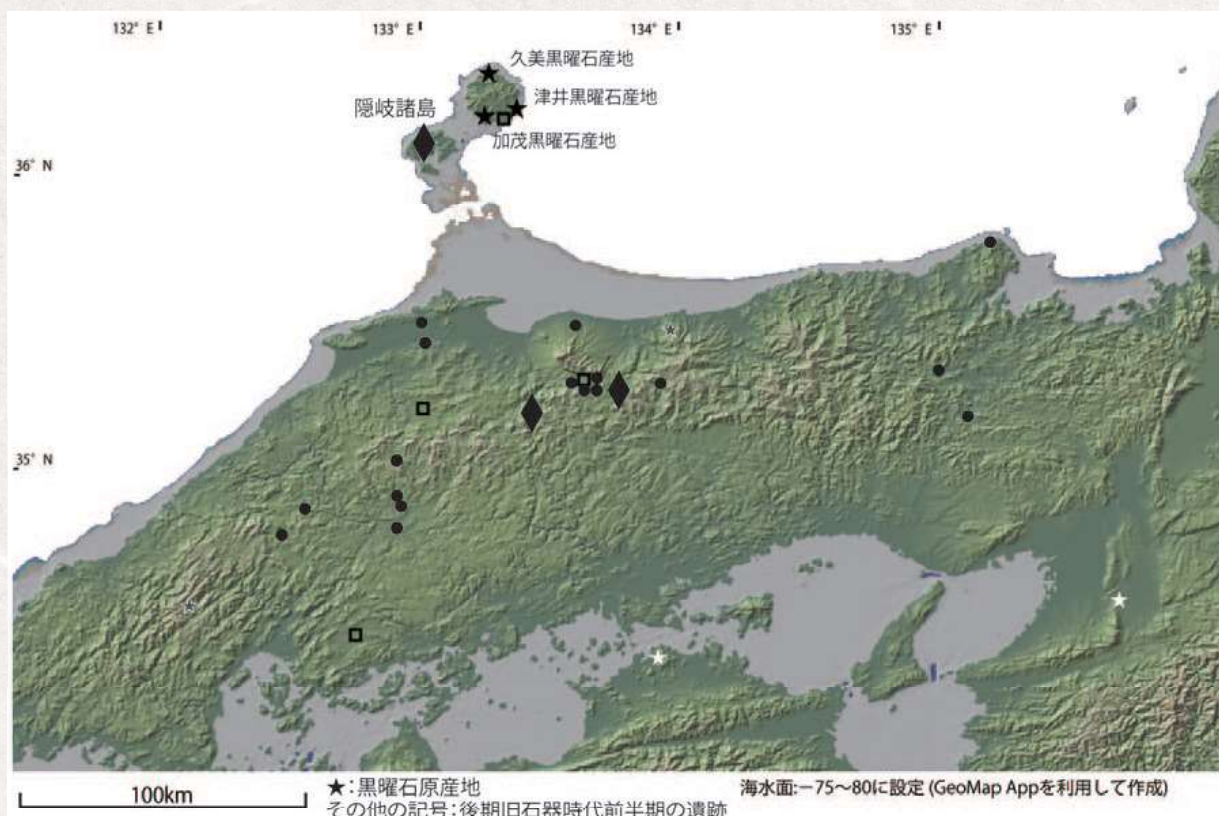
3. 人間生活の始まり（先史時代）

氷期で陸域が広がっていた旧石器時代と、大部分の期間が現在の中海・宍道湖は海だった縄文時代を、次の弥生時代から分けて、先史時代（文字が使われる前の時代）としてこのストーリーの中でお話します。

(1)氷河時代の松江周辺（後期旧石器時代）

日本列島への人間の到来 先にも記しましたように、日本列島に現生人類（ホモサピエンス）がやって来たのは、38,000年前ごろと考えられています。この時期は氷期で水面が下がっており、大陸との距離は今より短くなっていました。しかし氷期の間でも比較的気温が高い時期だったため、最寒冷期よりは海面は高かったと推定されています。本土と隠岐の間も、短いながら海峡を挟んでいた可能性が高い時期です。

舟で渡ってきた人々 人間は日本列島に舟を使って移動していたことは確実と言えます。またその最古段階から、海を渡る必要のある隠岐諸島や関東地方の伊豆諸島神津島（こうづしま）の黒曜石が、盛んに利用されていたことも分かって



後期旧石器時代前半期の地形推定図と黒曜石が出土した遺跡（灘・及川2022より引用）

います。日本列島渡来後まもなく、松江周辺で生活していた人間が石材として黒曜石を得るためには、渡海する必要があったのです。日本列島最古級と言われる京都府丹後半島の上野遺跡では、小片ですが黒曜石と玉髄が出土しており、日本海沿岸の交流が早くからあったことがうかがえます。また前ページ図のように、隠岐の黒曜石は中国山地周辺まで出回っていますので、結構頻繁に行き来があったらしく、松江周辺の人々にとって既に舟はめずらしいものではなかったかもしれません。

この時代を後期旧石器時代（以後「旧石器時代」と記します）と呼び、38,000～30,000年前ごろを前半期、としています。

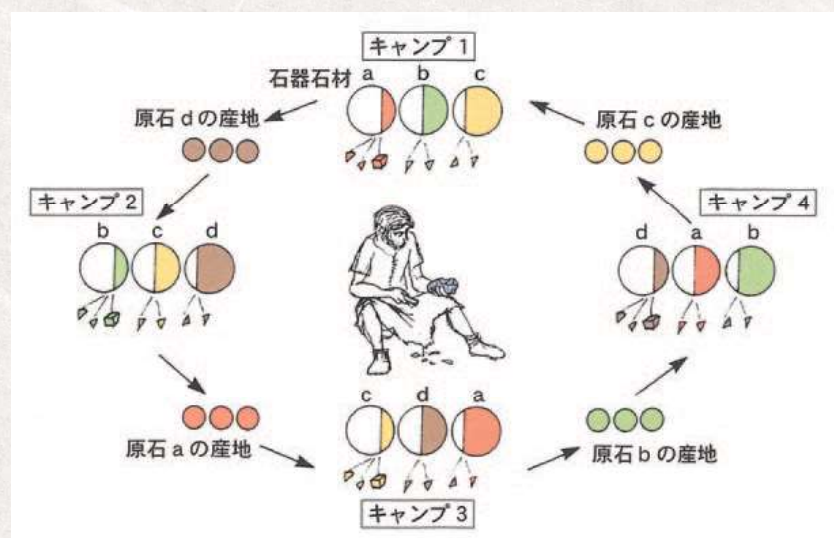
石刃技法 前半期でも古い段階に、日本列島に旧石器時代を特徴づける「石刃技法」が大陸から伝わってきます。短冊形のカミソリのような細長い石片を、連続して剥ぎ取るととても効率的な石器素材剥離技術です。そして少なくとも36,500年前には遡るといわれるこの技法の到来は、朝鮮半島から山陰を通じて渡ってきた、という説も有力になっています。日本海側の交通路の重要性が、日本列島の歴史の最初期からうかがえるのです。



実験で、石刃技法で剥ぎ取った石刃
(金彦中氏実験、写真提供)

旧石器時代人の生活様式—遊動—

当時の人々は現在とは全く異なる生活を送っていたと考えられます。旧石器時代の人々は、一所に定住することなく、移動をしながら生活を送っていました。食物は動物の狩猟と植物の採集が基本です。氷期には今は絶滅した大型動物が日



後期旧石器時代の石材産地を埋め込んだ遊動モデル
(稲田2010より引用)

本列島に棲んでおり、格好の狩猟対象でした。しかし大型獣は季節的に移動をしますし、木の実などの植物も採集する時期が限られていました。ですので、自然の動きに連動して、移動していたのです。

道具の中心は打製石器でした。石器を作るための材料（石材）は、割りやすくガラス質が高い石が適しており、それが採集できる産地も限られていました。人々は移動をしながら、途中で石材産地に立ち寄り、石器の材料を補給していたと考えられます。このような生活様式を遊動と呼んでいます。

最寒冷期から温暖化へ

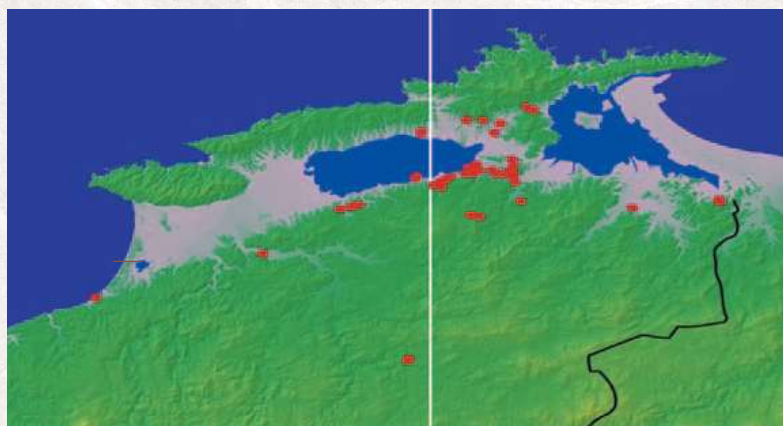
30,000年前以降、約25,000年前の最寒冷期に向かって、どんどん寒くなっていきます。氷期の中でも最も寒い時期から次第に温暖化する16,000年前までを後期旧石器時代後半期としています。最寒冷期には隠岐と本土は陸でつながっていました。隠岐の存在は松江から北の地形に大きな影響を与えており、島根半島から北へ大きな半島になっていました。旧石器時代も、湖に近い日本海とその沿岸は、人の移動に便利だったことでしょう。突出した半島は、立ち寄りやすい条件を満たしていました。



後期旧石器時代の古本州島を二分する地域性
(森先2022より引用)

地域性の発生

後期旧石器時代の後半期になると、日本列島の石器文化に地域性が明確になります。地域性は、現在の地方（例えば瀬戸内、東海など）と呼ばれるようなブロック範囲や、よく利用する石材流通範囲で、



島根県東部の旧石器時代の遺跡分布
(日本旧石器学会2022より引用)

石器の特徴や作り方にあらわれてきます。それをさらに俯瞰的にみると、日本列島の本州部分（古本州島という）を南北に二分する地域性が見られる、という説もあります。松江周辺は東北部、という大きなくりに入ることとなり、まさに環日本海で生まれた地域性といえます。

松江周辺の地形が生んだ旧石器時代の十字路口

松江の周辺、特に宍道湖南部には小高くて頂上が平坦な、段丘地形が広がっています。なだらかで生活や移動に便利なこの地域では、山陰で最も多くの旧石器時代の遺跡が見つかっているところです。遺跡が多い理由は、地形のほかにもいくつか考えられます。

メノウと玉髄

一つは、松江市南部の火山岩の山々、特に玉湯町の花仙山で良質の玉髄（ぎょぐずい）やメノウが採取できることがあります。旧石器時代の人々は、隠岐の黒曜石など遠方の石材を手に入れているだけではなく、近隣の石材として玉髄・メノウを使っていました。近くに石材採取ができるところがあるのは、とても有利な条件です。



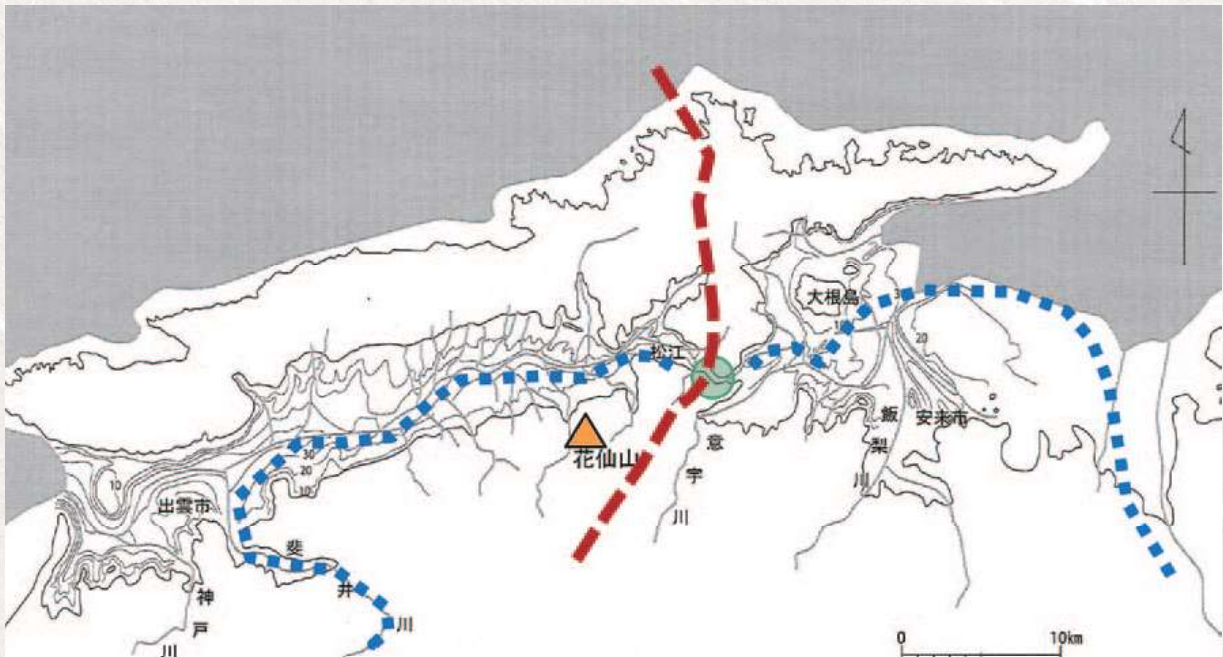
メノウで作った石槍
（田和山遺跡出土）

地形の特色

もう一つは、松江市南郊の地勢的な要因があります。氷期の旧石器時代は、水位が下がっているの
で中海・宍道湖は水をたたえてはいません。双方の湖部分は谷になって、そこには川が流れていました。ここで前節の(5)の時代に形作られた、南の茶臼山周辺の山塊と、嵩山・和久羅山の山塊が大きな役割を果たします。松江市街の東部では、南北から山がせり出すことによって、東西の大きな谷状のくぼみ（地溝帯）に、盾のように高まりを生み出しました。湖になる部分の川は、この高まりを分水嶺にして、東西に分かれて流れていました。今の矢田の渡しから塩楯島のあたりがその鞍部（山と山の間をつなぐ尾根）にあたります。

主要な交通路

旧石器時代の人々は移動しながら生活していましたが、その道筋に石器石材の産地を通して、石材補給をしていました。中国地方で最も優れた石材は、隠岐の黒曜石です。中国山地でも岡山県や広島県まで、相当量の黒曜石が運ばれています。隠岐へ陸路で向かうために、最も確実なルートは、目立つ高い稜線をつたって歩くコースです。中国山地の山稜や瀬戸大橋の橋脚が立つ各島



現在の松江市付近の旧石器時代末期の地形と主要な遊動経路の推定

（瀬戸内海は陸地だったので、山の稜線の最高所にあたります）では遺跡が多くあり、稜線が主要ルートの一つだったと考えられています。隠岐に行くには島根半島を横断する必要があります。中海・宍道湖地溝帯を渡ろうと思うと、山の稜線（尾根）がつながるのが、矢田の渡し周辺になるのです。そして矢田を分水嶺として東西に流れる川は、それぞれが中国山間地への経路にもなります。松江周辺は陸上の遊動路の交差点でした。そしてもう一つの石材、玉髄・メノウを産する花仙山もほど近く、旧石器時代の人々が経由するには最適だったといえます。

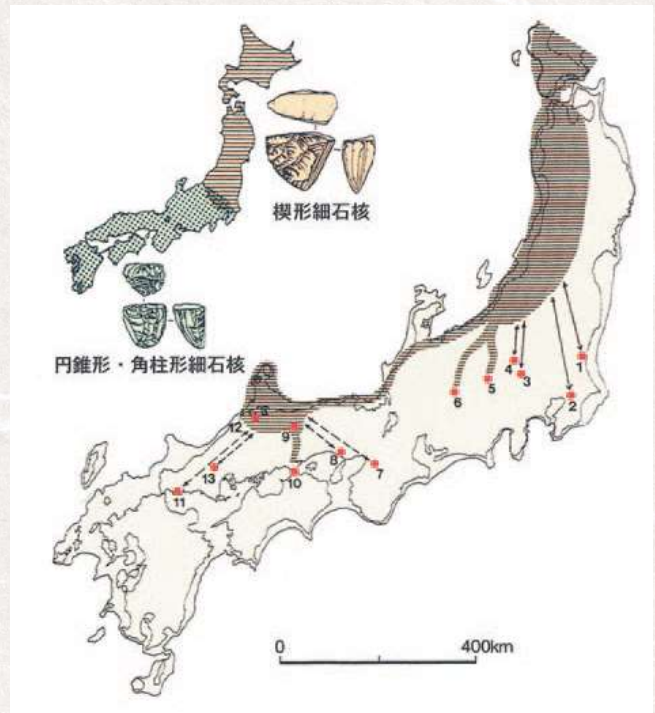
獣たちの移動

さらに、この地形が生み出す旧石器時代の生活環境の有利さは、人間の経路だけではありません。第5章でお話するように、現在の宍道湖に流入してくる川の水は、矢田の渡し付近で中海に流れる水量が大幅に減少します。ボトルネック効果といわれるもので（砂時計と同じ）水の流れは一番狭いところに規定されます。この地形は水がなくなったときには、どうなるでしょう。

東西に広がる川沿いの緩やかな平原は、オオツノシカやナウマンゾウなどの大型獣が移動する通路に最適です。ニホンジカやイノシシにも絶好の居住環境だったでしょう。特に大型獣を狩るためには、旧石器人たちは季節的に集結して知恵を絞ったはずです。獣たちが平原を縦断するためには、このボトルネックを通過しなくてははいけません。大勢で追い込み猟をすれば、意図的にこの狭い谷に誘導することも可能だったのではないのでしょうか。その証拠は大橋川の下にあったとしても、流されてしまっているでしょうが。

旧石器時代終わりごろの植民

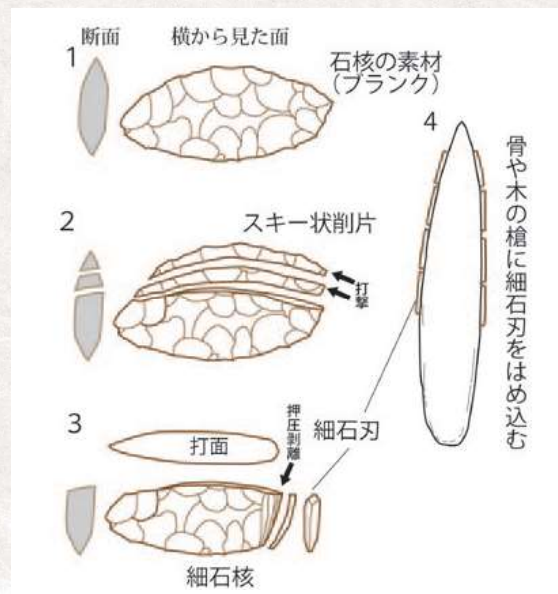
18,000年前ごろ、長さ2～3cmほどの小さな剥片（細石刃）を大量に製作する細石刃文化の時代となります。木や動物の角で加工した道具本体に、小さな刃をはめ込んで使う組み合わせ石器として用いられました。この時に東北地方から、居住場所を求めて集団が移住してきます。それは石材と石器を作る技術から知ることができます。



北方系細石刃製作技術の広がり（稲田2020より引用）

細石刃のはじまり

日本列島では、まず北海道にシベリヤから細石刃を利用する文化が南下してきます。細石刃は、小さなカミソリの刃のような短冊形の石器で、動物の骨や角、木などで作った道具に複数をはめ込んで使います。それは18,000年前ごろに東北地方にも広がり、北方系の技術で細石刃を生産していました。石を割って木の葉形に成形して、さらに平らな打面を作って細石刃をとっていく技術は「湧別技法」と呼ばれ、北海道・東北地方に見られる技法です。



湧別技法の模式図

植民集団の到来

この技術で作られた細石刃と細石核（細石刃をとられる側の石のコア）などが、まずは岡山県恩原遺跡群で発見されました。石器群は明らかに湧別技法を使っており、石器の中には東北地方の硬質頁岩が混ざっていました。さらに隠岐の黒曜石が少量と、たくさんの花仙山で採られた玉髄・メノウで湧別技法独特の石器が作られていました。後には松江市花仙山周辺の四つの遺跡から、玉髄・メノウ使って湧別技法を利用して作られた石器が見つかりました。

つまり、東北からやって来た湧別技法集団は、中国山地を拠点に住みつきましたが、故郷の石が枯渇すると、まず隠岐で黒曜石を採集、そして松江周辺にやってきて玉髄・メノウをたくさん採集して、硬質頁岩の替わりの石としたのです。その後、遊動する中で何度も花仙山を訪れ、石を補給したようです。



恩原2遺跡で出土したメノウで作った
湧別技法の石器（稲田2020より引用）



玉湯町正源寺遺跡から出てきた玉髄の
湧別技法による石器

湧別集団の基点に 玉髄・メノウや黒曜石の湧別技法にかかわる石器は、近畿、四国、山口県まで広がっていて、湧別技法集団の行動範囲がとても広がったことがわかります。このような広い範囲の人間集団の動きも、当時の日本海沿岸がルートとなったと考えられ、松江周辺は西日本への拡散の基点となっていたのです。また、大草町上立（のぼりたて）遺跡や玉湯町宮ノ前遺跡からは、東北地方の頁岩で作った石器が出土しており、松江にも東北から人が訪れていたことが直接わかります。

以上のように、旧石器時代から日本海沿岸を通じた人の動きが盛んだったことがわかります。細石刃文化期（18,000～16,000年前ごろ）には、西日本の文化に大きな影響を与えた、東北の細石刃文化流入の基点ともなりました。長い時間かけて形成された黒曜石や玉髄・メノウの存在や、北に突出する半島状の地形が、人の交流の大きな要因となったと考えられます。この特質は、その後の松江周辺の歴史にも引き継がれていきます。



上立遺跡出土の
硬質頁岩製石刃



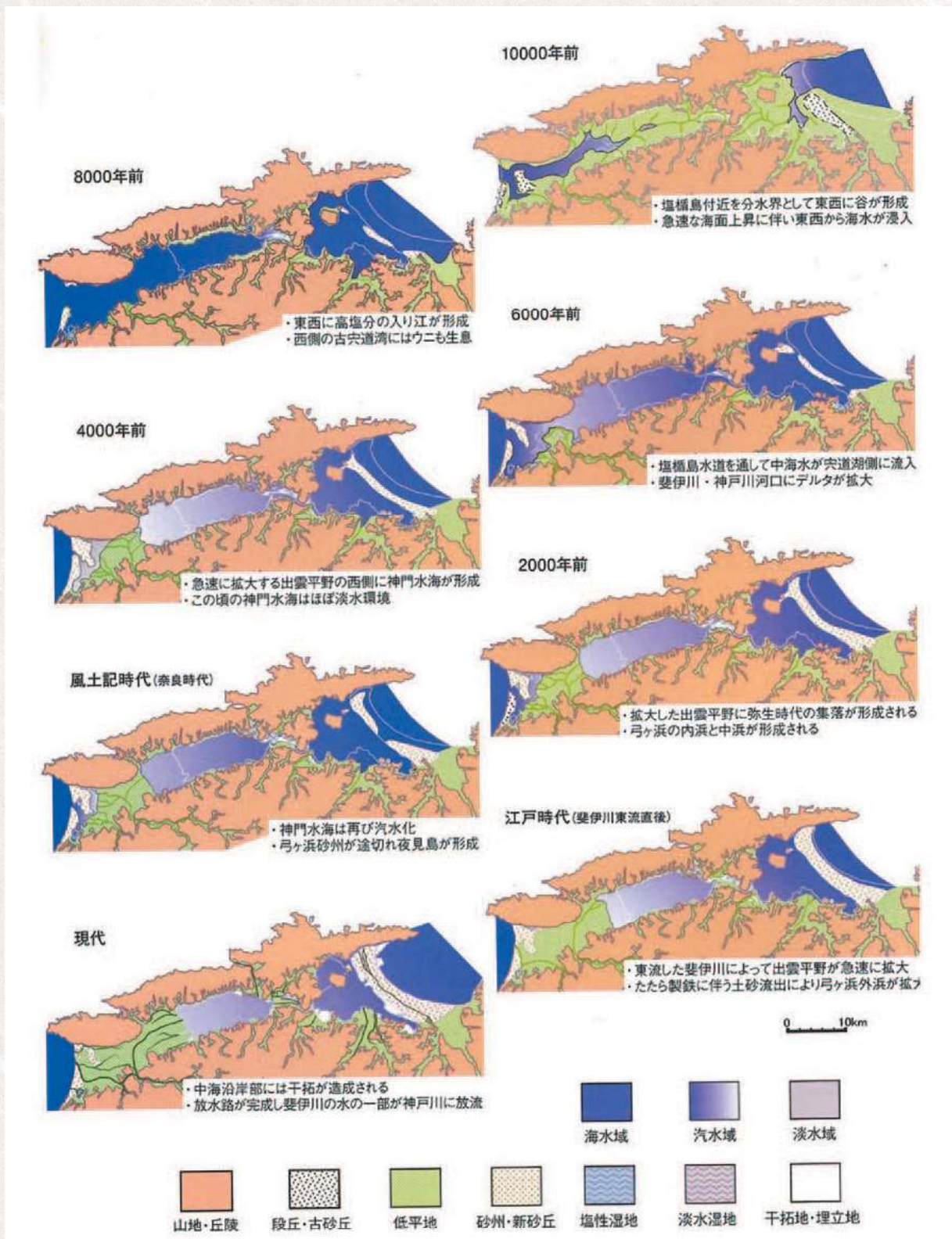
● 松江の石をめぐるヒストリー

<https://sitereports.nabunken.go.jp/131528>

(2) 中海穴道湖が海となった時代（縄文時代）

温暖化と海進

1万年前ごろから、地球全体の温暖化が急速に進んでいき、極地で氷となっていた水が溶け出すことで、海の水位が高くなっていきます（海進）。



穴道湖・中海周辺地域の1万年前以降の古地理の変遷

(『松江市史 史料編1 自然環境』より)

それにより、氷期には陸地だったところも海に沈んでしまった場所が増えました。縄文時代のことです。旧石器時代に谷地形だった現在の宍道湖や中海付近は、東西から次第に海の水が浸入していき、8,000年前ごろには東西に開く、二つの大きな湾となりました。この時期は完全に海の時代になります。ところがボーリング調査によると7,600年前ごろには、宍道湖域の塩分濃度が下がったことがわかっています。斐伊川や神戸川が流す土砂が湾の西側に砂州を作り出し始め、海水が入りにくくなっていたと考えられます。

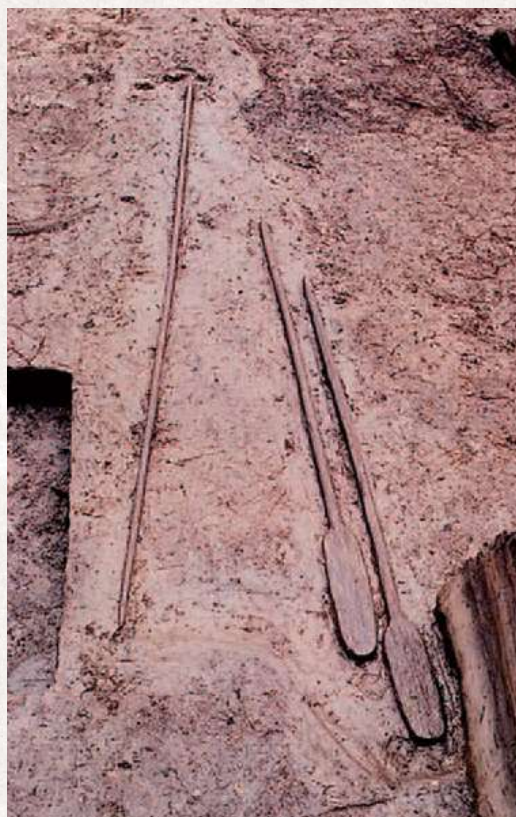
宍道湖と中海貫通 温暖化がピークを迎える7,000年前ごろ、水位は松江市矢田町付近の分水嶺を超えて二つの湾をつなぎ、大橋川が形成されます。今の地形の原型が出来上がったといえるでしょう。この時期に遺跡が一気に増加します。遺跡は大きく二つの類型に分けることができます。

前節の(5)の時代以降に、海が山塊を削り、さらに軟らかい部分に洞穴を作り出しました。洞穴のうち、東側の湾を閉め始めた弓ヶ浜の原型の対岸、美保関町森山周辺は内湾化して波浪が少なくなります。その洞穴を住まいとして、縄文人が遺跡を残しました。国指定史跡のサルガ鼻洞穴遺跡がその代表です。

貝塚 また宍道湖や大橋川に沿って形成された後の佐太水海や古松江潟に接するように、鹿島町佐太講武貝塚や西川津遺跡、島根大学構内遺跡などが残されます。佐太講武貝塚は、ヤマトシジミを中心とした大規模な貝塚を形成しており、内水域の汽水環境が豊かな魚介類をもたらしたことがうかがえます。島根大学構内遺跡では、



佐太講武貝塚 階層の剥ぎ取り
(鹿島歴史民俗資料館)



舟をこぐ櫂と、魚を刺すヤス
(島根大学構内遺跡)

丸木舟と櫓（かい）が出土しており、水域に接して縄文人が生活していたことがわかります。

縄文人の食料 縄文時代は温暖化により豊富となった森林資源、特にトチやドングリ、クリ、クルミなどの堅果類を主要なエネルギー源としながら、狩猟と水産資源が重要なたんぱく源となっていました。特に松江周辺は、外海、内海、潟湖、淡水域それぞれに恵まれ、多様な水産物が縄文人たちの生活を支えていました。特に魚骨や貝類、獣骨などが貝の石灰質に守られて残っている貝塚では、骨等の実物から直接食べ物を知ることができます。魚類ではサメ、エイ、サバ、イワシ、イシダイ、クロダイ、スズキ、マグロ、フグ、コチなどの海産魚、コイ、フナ、ナマズなどの汽水・淡水魚が見られ、貝類は圧倒的なヤマトシジミのほか、イガイ、アワビ、サザエなど海の岩礁に棲む貝もみられます。サルガ鼻洞穴ではサルボウ（私たちが今食べている赤貝）やアサリがみられるのも注目されます。

以上のように、中海や宍道湖が湖になる前の縄文時代にも、南北の海とその周囲の潟湖などの汽水域に恵まれ、松江周辺はとても住みやすく、また人々の交流がしやすい環境だったといえます。

なお縄文時代の食の詳細は、松江のヒストリー集「特色ある松江の食と名物のヒストリー」をご覧ください。



● 特色ある松江の食と名物のヒストリー

<https://sitereports.nabunken.go.jp/131529>